
Xファイル

Haduaru

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Xファイル

【Nコード】

N85460

【作者名】

Haduaru

【あらすじ】

「皆さん、【Xファイル】というのをご存じですか？科学では証明できない生物や現象。それを収集したものが、【Xファイル】です。それでは第1ページ目をご覧ください。」

「友達。それは人によって様々です。慰めたり、話したり、最悪喧嘩友達なんかもいるかもしれませんね。今回の主人公の友達は一切何なんでしょうか？彼の友達は何もしゃべらないし何もしない。忘れられた過去の友達。だからといって彼は、友達を……。そんなことをしたから彼は大変な事になってしまいます。おっと、これ以

上は「男は苦笑いをする。

「それでは、1ページ目を開いて、自分の目で、お確かめください」
男はニヤツと笑ってファイルを閉じた。。。。

トモダチ

何も無い殺風景な部屋に一人、男が立っている。
眼鏡をかけた少し背の高い賢そうな男。

ファイルを手元に部屋の中心で立ち止まった。

「皆さん、【Xファイル】というのをご存じですか？科学では証明できない生物や現象。それを収集したものが、【Xファイル】です。それでは第1ページ目をご覧ください。」

「友達。それは人によって様々です。慰めたり、話したり、最悪喧嘩友達なんかもあるかもしれませんね。今回の主人公の友達は何なんですか？彼の友達は何もしゃべらないし何もしない。忘れられた過去の友達。だからといって彼は、友達を……。そんなことをしたから彼は大変な事になってしまいます。おっと、これ以上は」男は苦笑いをする。

「それでは、1ページ目を開いて、自分の目で、お確かめください」
男はニヤツと笑ってファイルを閉じた。。。

トモダチ

あんな事、あんな事しなければよかった……。あんな事。

「うわあああああああああああああああああ！」

1日前

僕は広樹。小学5年生。明日は学校で研究の発表をしなければいけない。だから僕の家には同じ班の友達4人が来ている。正直言って、なぜ僕の家なのだろうか……。まあ来てしまったものはしょうが

ない。

「広樹君。まだ画用紙あるかな？あと1枚でできるんだけど。」

「あ、あああるよ。ちよつと待って」

そう言つて広樹は自分の押し入れの中を探る。学校でもらつて来た画用紙が1枚足りなかつたのだ。

（あれ？この辺にあつたはずなんだけどな・・・）

広樹は少し下を見た。古くなつた箱がある。

（なんだろう。）

広樹は箱を開いて「あ！」と目を大きく開いた。

「ヒロシ君だ！」

思わず声が漏れてしまった。ヒロシ君は人ではない。転校して友達ができなかつた僕は、自分で粘土の人形を作り、それを【ヒロシ君】と名付けた。悩みを聞いてくれるも、一緒に遊ぶも、肌身離さずもつていったものだ。それはそれは大事にしたものだ。しかし、友達が出来る内に、ヒロシ君は僕の記憶から薄れていった。懐かしい。広樹は画用紙のことなんて忘れて押し入れから出した。

「おい広樹。なんだそれ？」

大輝だ。少し太つてガキ大将みたいな奴だ。まあなかなか頼りがある。

「ああ、僕の友達が出来なかつたときの、たつた一人の友達なんだ！」

「へえそうなのか。」

大輝はヒロシ君をひよいと僕の手から取つて、馬鹿にしたように笑つた。

「ははは。腕が伸びる〜」

大輝はヒロシ君の腕を伸ばした。そりゃ粘土だから伸びるだろう。

「おい！やめろよ」。返せ！」

「そうよ大輝君。それは広樹君のたつた一人のト・モ・ダ・チなんだから。」

陽子と愛菜が僕をからかう。わざわざ「トモダチ」の部分を強調し

てニヤニヤ笑って僕を見る

「ち、違うよ！こんな物！」

（僕にはもう友達がいるんだ。もうヒロシ君なんて。こんな物！）
広樹はヒロシ君を片手に持って手を天井に向かって振り上げる。

「こんなもの。もう友達じゃ無い！」

広樹は思いつきりヒロシ君を地面に叩きつけた。グチャツツッ！
鈍い音とともに一瞬時間が止まったように思えた。

形がグチャグチャだ。もう原型をとどめてない。かすかに顔がわかるぐらいだ。

「あゝあ。わざわざそんなことしなくてもいいのに」

4人は声をそろえる。

「いや、いいんだ。もう。」

床には、原型をとどめてないヒロシ君がくっついていてる。

.....

やっと終わった。もう6時だ。

「あゝやっと終わった。なかなかのできればだな」

大輝が自信ありげにいう。確かになかなか良い出来栄えだと自分でも思う。

「じゃあな広樹」

「じゃあね広樹君」

「じゃあね」

「じゃあな広樹。また明日」

4人は帰っていった。その一人。大輝の背中の服の端には、とれたヒロシ君の腕ががちりと掴んでいたというのは、誰も気づかなかった.....

.....

次の日

.....

「はい。5班の発表でした。礼！」

「ありがとうございます！」

拍手を受けて、やっと緊張が和らいだ。終わった・・・

帰りの会の後。放課後だ。

同じ班の吉木とトイレで話をしていた。やはり発表の話だ。

「今日大輝来てなかったな。昨日はあんなに元気だったのに、どうしたんだ？」

「だよな。あいつ、今まで学校休んだこと無いのに」

「緊張してズル休みでもしたんじゃないか？」

「ハハハハハハ」

二人でそんな話をしていると、トイレの個室から音がした。何かが倒れる音のようだ。

「え、おい。誰かいるのか？」

キィイと、不気味な音を立ててゆっくりドアが開く。出てきたのは大輝の頭だ。

「え、大輝。お前来てたのか？なんでトイレでいるんだよ！」

無表情だ。それに酷く色が悪い。少し沈黙が続いた。続いたといつてもほんの5秒ぐらいだ。すると、大輝の首が恐ろしく伸びて吉木に襲いかかる。まるで粘土のようだ。

「ヒ、ヒィィィィィ、広樹！助けてくれ！」

泣きながら吉木は助けを求める。僕は吉木の腕を掴み引つ張った。大輝じゃない・・・大輝の頭の形をした粘土が吉木の足に絡みつく。広樹は思いつきり引つ張るが、吉木の足から粘土が離れる事は無い。そのとたん。吉木の足が粘土になった。グニョウと伸びて足が粘土の色になっていた。

「ひ、広樹！助けてくれ！」

すさまじい勢いで吉木の体が粘土になっていく。ほんの数秒で吉

木全体が粘土になってしまった。

広樹は手を離す。大輝と吉木が粘土になってしまったのだ。2つは絡み合いながらグニョグニョとしている。そのとたん、粘土が伸びてきて、広樹の顔をかする。

「う、うわあああああ」

広樹は大慌てで学校から出た。運動場の水道で顔を洗う。

「こ、これは夢だ。こんなことありえない……。人間が粘土になるなんて……。は、はは」

広樹は少しパニックを起こしていた。何が起きているのか分からない。広樹は顔を洗おうと水を出した。冷たい水で顔を洗う。顔を拭こうとしたそのとたん、蛇口から粘土が出てきた。

「う、うわあああ。なんだこれ！」

粘土は全蛇口から出てきて1つの塊になる。

「こ、これは」

広樹は言葉が出なかった。だって、これは……

「ヒ、ヒロシ君！」

そう。大きな粘土の塊はどこをどうみてもヒロシ君だ。自分が作ったヒロシ君。自分が壊したヒロシ君。

ヒロシ君は、大きな手を広樹の腹に強く当てる。広樹の体も粘土に変わっていく。

「やめろ。ヒロシ君、僕ら友達だろ。なんでこんな……。ことを。」

肺も粘土になっていく。息苦しい。ヒロシ君は少し止まって。

「ト……。モ……。ダチ？」

「そ、そう。友達だろ？」

そう言ったとたん。ヒロシ君の顔が鋭くなった。恨みに満ちたような顔だ。

「キミハソノトモダチニ……」

ヒロシ君は粘土になりかけた広樹を空に向かって振り上げた。

「コンナコトヲシタダロオオオオオ！」

広樹の体はものすごい勢いで地面に叩きつけられた。

次の日、運動場は賑わっていた。生徒、先生の目に映っているのは山積みになった粘土だった。その積み上げられた粘土の端に、広樹の原型のとどめていない顔があることは、誰も気づかなかつた・・・

トモダチ終了

- - -
- - -
- - -

また不思議な空間に男が立っている。

「いや〜。恐ろしいですね。過去の友達に殺されてしまうなんて。

友達と言えども所詮他人ですからね〜。え？そんな事ないって？どうなんでしょつか。」

「古い物には命が宿ると言います。ここに物置にほこりをかぶっていた、ぬいぐるみがあります。これも命を宿しているのですかね〜。」

彼はぬいぐるみを地面にそつと置いた。

「あなたの子供の時の大切なぬいぐるみ。今はどこにありますか？もし記憶にない。もしくは無くなったのなら。それはどこかへ歩いて行ったのかも・・・。」

男はニヤツと笑う。不気味な顔だ・・・。

「それでは皆様。また会いましょう。次はどんなファイルなのでしょうつか。楽しみです。」

彼は地面に手を伸ばした。

「あれ？ここに置いてあったあつたぬいぐるみ知りませんか？」

・・・一人でどこかに行ってしまったのかもしれませんね。」

男が暗闇に向かって歩く。彼の姿が見えなくなった時、部屋の隅の壁の穴に、毛玉が1つ、転がっていた・・・。

くトモダチく（後書き）

ミステリー系を書きたいと思い書いてみた作品です。今は少しばかり忙しいので次回作の投稿はすこし遅れるかもしれませんが。皆さん応援よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8546o/>

Xファイル

2010年11月12日00時40分発行